明治末から昭和初期における宝塚新温泉の経営方針の形成について

FORMATION OF MANAGEMENT POLICY OF 'TAKARAZUKA SHIN-ONSEN'

-AMUSEMENT PARK WITH HOT SPRING BATH-

FROM THE END OF MEIJI TO EARLY SHOWA ERA

安野 彰*

Akira YASUNO

'Takarazuka Shin-onsen', a recreational facility with hot spring bath, had been developed to a large Amusement Park at suburb of Osaka. Ichizo Kobayashi managed it in the first half of 20th century. At the beginning, he tried to make cooperate with existing hot spring town at the other riverside. But his plan didn't come off. So he decided to manage 'Shin-onsen' independently of old town, where many geisha girls were employed. And he tried to differentiate the girls' opera, which he had established, from geisha that were equated with a kind of demimonde, developing his side more with fresh image.

Keywords : *Takarazuka, Amusement Park, Hot Spring, Suburban Development, Recreational Facility, Girls' Opera*

宝塚, 遊園地, 温泉, 郊外開発, 娯楽施設, 少女歌劇

1. はじめに

日本の近代における遊園地は、都市近郊の開発に際して各地に開設された。その多くは、新しい土地への憧憬を見開かせ、諸種の郊外文化を発信することで、中流社会を形成する役割の一端を担ったといえるだろう。それらの中で、箕面有馬電気軌道（現在の阪急電鉄、以降は箕有電軌と記す）によって明治末に開設された宝塚新温泉（以降は適宜、新温泉と記す）は、少女歌劇という象徴的な要素を擁したこともあり、同時代の代表的な遊園地として類縁の他施設に影響を与え続けた¹⁾。この施設での試みやスタイルが形を変えつつも、京阪神や京浜をはじめとする大都市近郊の他、全国各地の施設や興行で模倣され、女性や子供あるいは家族連れを重視する清新な大衆文化の素地を形成したといっても過言ではない。すなわち、宝塚新温泉が、時代に合わせて如何なる設備と空間を伴って来場者を惹きつつ変容を遂げたのか、具体的に検証することは、郊外を源流のひとつに持つ、日本の中流あるいは大衆文化の成立過程の一端を、建築や都市との関係から明らかにすることになる。

箕有電軌は、1911(明治44)年5月1日に同施設を開設し、「宏壯華麗な」大浴場と家族風呂、翌年に新設された「パラダイス」によって遊客を集めた。新温泉は、その後も昭和初期に至るまで敷地の拡張を続けながら、様々な設備を整えていくことで、日本を代表する郊外娯楽施設としての地位を確立していくことになる。そして、1960(昭

和35)年に宝塚ファミリーランドと改称してからも、2003(平成15)年4月7日の閉園まで、日本における代表的な遊園地として知られていた²⁾。

宝塚新温泉が初期の段階から女性や子供に対する顧客の意識を高くして経営されていた事実は、これまで多くの研究者によって触れられてきた。1913(大正2)年3月には、婦人博覧会が行われ、新時代の女性像を主題にし、その生活全般に対する具体的な提案や方向性を示していたとされる。1914(大正3)年以降にも各種の博覧会が実施された。しかし、これまでの研究では、施設全体のあり方や昭和初期に至るまでの展開やその背景について丁寧に分析されているとは言い難く、検討の余地が少なくない。都市社会学をはじめ各方面から施設への言及があるものの、そこに集められた諸設備の変遷については大まかな流れを現阪急電鉄の社史や、創業時から経営と開発を主導した小林一三による回顧録『逸翁自叙傳』の記述から確認する程度に止まっていたといえる³⁾。

例えば、宝塚や箕有電軌（現阪急電鉄）による当時の沿線開発については、代表的な既往研究として、津金澤聰廣や竹村民郎による一連の著述があるが、新温泉の施設についての分析や言及に精緻さは見られない⁴⁾。作家の阪田寛夫による『わが小林一三』は、小林一三の半生について多数の文献を参照しながら丁寧に検証した労作で、新温泉については草創期の考察が、上記を含む複数の研究者に引用されてい

* 文化学園大学造形学部建築・インテリア学科
准教授・博士(工学)

Assoc. Prof., Dept. of Architecture & Interior, Faculty of Art & Design, Bunka Gakuen Univ.,
Dr. Eng.

る⁵⁾。施設史という観点からは、川島智生が、初期の新温泉について同時代の欧州で発達した浴場施設との類似を指摘しているが、何れの論稿においても、遊園地という枠組みが意識されておらず、その後の施設の展開についての検討が乏しい⁶⁾。また、昭和初期の宝塚については、松本佳子が、阪神間在住の婦人達による社交活動を分析する視点から、新温泉の一面を拠点にした宝塚女子青年会を採り上げているが、ここでも新温泉という施設のあり方については言及されない⁷⁾。

そこで本研究では、昭和初期までの宝塚新温泉の設備や建築物の変遷について、経営を主導した小林一三の言説などから垣間見られる各時代における施設の方向性と照合することから関係づけ、日本近代の郊外開発史のなかで重要な文脈上にある宝塚新温泉が、当時の社会においてどのような性格の場所と空間を形成したのかを明らかにすることを目的とする。その過程として、まず本稿においては、箕有電軌の広報誌や少女歌劇の機関誌に掲載された記事や関連深い小林の言説、新聞記事による即時的な情報を踏まえ、宝塚新温泉における開発の方向性やそれに関わる経営方針が次第に形成されていく過程を明らかにすることで、施設が拡張・展開されていく背景について考察する。

なお、筆者は以前、宝塚市史資料室の依頼により当該施設の変遷について、学位論文の一部を下敷きに、同室の紀要に寄稿したが、以降、新規資料を加えて再検討を進めてきた⁸⁾。本稿は、紀要で示した内容の一部を基礎にしつつも、その後の調査と考察を反映させて修正し、大幅に改稿したものである。

2. 史料と方法について

宝塚新温泉の経営に関する史料は、断片的なものを除いて明らかにされていない⁹⁾。社史をはじめとする各種発行物、小林一三による回顧録などにその概要が記されているものの、宝塚新温泉の施設については、具体性が乏しかったり、正確な時期を欠いていたりすることが少なくない。本稿では、そうした情報を参照しつつも、主に逐次刊行物に見られる記述を見直すことで検討をすすめる。

そのための史料として、まず、箕有電軌発行の『山容水態』(1913(大正2)年7月～1917(大正6)年8月)と宝塚少女歌劇団発行の『歌劇』(1918(大正7)年8月～)を挙げることができる。『山容水態』は、それまでに発行されていた絵葉書の代わりに、沿線の遊覧地や催しの情報を伝える目的で箕有電軌から刊行された小冊子で、沿線に開発された住宅地の様子も記載される¹⁰⁾。翌年からは少女歌劇の情報も加えて、新温泉の様子を伝える記事を掲載していた。『山容水態』が終刊の1年後に創刊した『歌劇』は、少女歌劇の機関誌として機能した。そのため少女歌劇の公演情報や劇評などが多い。同時に、新温泉の様子についても断続的に情報があるが、『歌劇』では、特に施設の運営を主導した小林一三による言説を重視する¹¹⁾。これらは、出版の趣旨や発行者等において性格の違いがあることを否めないが、何れも阪急系列から発行されていること、他の有用な資料を見いだせないことを考慮すれば、許容される範囲だろう。

また、両史料では、総ての時期を網羅できないため、社史のほか、リーフレット、観光案内誌、新聞記事、電鉄や劇団が発行した絵葉書等を適宜参照している¹²⁾。このうち新聞記事については、その当時、会社側がスクラップしたものが、阪急や歌劇関連の史料を保管する池田文庫に所蔵されるが、施設についての記事が乏しい大正半ばまでは、

表1 昭和初期までの宝塚新温泉における設備更新の概要

年	事項
明治43	★宝塚線、箕面線開通
明治44	★箕面動物園開業
明治45	宝塚新温泉開業(浴場施設)
大正2	宝塚新温泉パラダイス(室内水泳場と演芸場を主体にした娯楽館)を設置
大正3	パラダイス新館(展示室・後に宴会場と図書館に)を設置
大正4	
大正5	
大正6	
大正7	
大正8	箕面公会堂を移設(歌劇場として)
大正9	★神戸線開通
大正10	★西宝線開通
大正11	宝塚野球場を設置
大正12	新温泉以外を焼失 パラダイス館再建 中劇場・食堂を設置
大正13	宝塚大劇場(S10焼失)・宝塚ルナパーク・動物園を設置
大正14	和食堂を設置
大正15	
昭和2	ルナパークと新温泉間の連絡陸橋を架ける 植物園を設置
昭和3	
昭和4	
昭和5	
昭和6	ルナパークと植物園間に連絡陸橋を架ける 文芸図書館・女子青年会館を設置
昭和7	五十米公認大プールを設置
昭和8	
昭和9	
昭和10	宝塚大劇場再建 宝塚キネマ館・宝塚公会堂・宝塚熱帯動物飼育園を設置
昭和11	
昭和12	
昭和13	映画製作所を設置
昭和14	昆虫館を設置
昭和15	
昭和16	
昭和17	厚生児童園を設置

『阪神急行電鐵二十五年史』、『京阪神急行電鉄五十年史』等を参照した。

★は宝塚新温泉以外の参考事項

比較的に宝塚についての記述が多い大阪朝日新聞神戸附録を通覧した¹³⁾。宝塚新温泉について時代を通して直接的に記録したものは見あたらないため、このように多様な二次史料を用いることで補完している。

対象とする時代については、経営を主導した小林一三の職位を考慮する。小林は、1907(明治40)年6月30日に箕有電軌の追加発起人となり、設立事務から任され、同年下期から1909(明治42)年上期までを専務取締役として会社を牽引するが、沿線にある岡町住宅地の用地買収に絡んだ贈賄の疑いをかけられ、1916(大正5)年上期まで一旦取締役に退く。1916(大正5)年下期に専務に復帰し、1926(大正15)年から1933(昭和8)年上期には社長を務め、以降は1936(昭和11)年上期までは会長となって、新温泉の経営においても一貫して主導的な役割を果たした¹⁴⁾。その後も影響力を持ち続けるが、開設から昭和初期までが、小林の意向が強く反映された時代であったと捉えることができる。

次に、昭和初期までの宝塚新温泉の開発を俯瞰しておく。表1に示すように、当初は入浴施設としての性格が強いが、翌年には、娯楽館「パラダイス」を新設している。さらには婦人博覧会の際に「パラダイス新館」を建設するなど、開設から数年かけてその体裁を複合娯楽施設へと整えていく。その後暫くは、箕有電軌が箕面に設けていた公会堂が歌劇場として移設される以外に目立った開発は行われていないが、神戸線(十三-神戸間)と西宝線(西宮-宝塚間)の路線が相次いで開通すると、阪神間の郊外住宅地や神戸方面からの遊客増加を見込んでか、1924(大正11)年から1935(昭和10)年頃にかけて大規模な敷地の拡張を伴って施設の拡充が継続的に進められる。これには、1923(大正12)年の火災、1935(昭和10)年の大劇場焼失に伴う再開園が契機になっているが、いずれにせよ、戦前期の宝塚新温泉における施設の展開は、開設直後の明治末から大正初頭にかけてと、

大正末から昭和初期にかけてという 2 つの時期に分けられると見てよい¹⁵⁾。これらの 2 期間の移行は、偶然かも知れないが、概ね『山容水態』から『歌劇』へのそれと符合しており、開設前後の様子に加え、両者に見られる新温泉に関連の記述をそれぞれ検討することで、2 つの時期の状況を捉えることができよう。

これらの事情を踏まえ、本稿では、まず、開設前後において箕有電軌が既存温泉街に働きかけていたと見られる宝塚の繁昌策を中心に、既存温泉街との関係を模索する様子について検討する。新温泉のあり方が繁昌策の如何によって左右される関係にあるためである。次に、『山容水態』等に表示された大正初頭までの新温泉の様子や娯楽場や行楽地に対する見方について分析する。そして、以上に対し、『歌劇』誌上等で見られるようになる小林一三の娯楽施設や宝塚新温泉のあり方についての見解を位置づけることで、宝塚新温泉において昭和初期までに展開された開発の主旨を明らかにしたい。

3. 宝塚新温泉の開設と既存温泉街との関係の模索

箕有電軌は、1906（明治 39）年 12 月に軌道敷設が認可され、1910（明治 43）年 3 月 10 日に梅田-宝塚間並びに石橋-箕面間で開通する。その後、2 つの終端地である箕面と宝塚にそれぞれ娯楽施設が設けられ、遊山による乗客確保が目指された¹⁶⁾。箕面には、瀑布と溪谷といった自然美を主とする観光の要素があった。一方当時の宝塚は、阪鶴鉄道ならびに箕有電軌の開通後、郊外の温泉地として賑わいを見せていたが、他の温泉と同様、多くの芸妓を抱え、花柳街としての側面を持っていた。箕有電軌は、それぞれの既存環境を踏まえ、新規の娯楽施設を建設・運営していくことになる。

箕面動物園は、1910（明治 43）年 11 月 1 日に開園する。ドイツのハーゲンバック動物園に倣った展示手法を参照しつつ、余興場、観覧車のほか、松風閣という和風の接待施設などを整えて複合娯楽施設として機能した¹⁷⁾。また、南に大阪平野を臨む丘陵地を利用して、眺望や散策を楽しめるように工夫があった。日光の神橋を模した橋や朱塗りの山門を入口に設けたことはその一つといえる。1911（明治 44）年 10 月の山林こども博覧会や児童作品展をはじめ、当初から子供を対象にした催事が行われるなどしたが、自然環境への配慮や動物の屎尿処理問題などを理由に、1916（大正 5）年 3 月末に閉園している¹⁸⁾。社史や小林の述懐によれば、箕面からの撤退を決断した結果、宝塚へ投資を傾注したとある¹⁹⁾。その決断時期について明確にすることはできないが、実際に撤退した 1916（大正 5）年前後は、新温泉にとっても重要な転機の一つといえよう。

箕面動物園に続き、宝塚新温泉が開業したのは 1911（明治 44）年 5 月 1 日だが、予定では 1910（明治 43）年 11 月 3 日であったことが当時の新聞記事から読み取れる²⁰⁾。当初は動物園とほぼ同時の開業を目指していたことになる。しかし、大理石と蛇紋岩の到着が遅れるなどして、半年後の開業となった。大林組の記録に依れば、宝塚新温泉建設の受注が 1910（明治 43）年 5 月、竣工が 1911（明治 44）年 3 月とある²¹⁾。なお、開業直前の記事で建築物の概要について報じられているほか、浴場以外の施設として、植物園の計画や箕有電軌による温泉旅館が駅前に竣工したこと等が読み取れる²²⁾。

実際に出来上がった宝塚新温泉の計画主旨や施設の方向性を具体的に文章で示す当時の文献は見受けられないが、小林一三による『逸翁自叙傳』からは、新温泉の開設経緯を説明するものとして、次の記

述が良く参照される。

「開通後半々年もたたぬ間に、又一つのトラブルが起つた。元来此の会社の名称が箕面有馬電気軌道株式会社と言ふのであるから、設立当初の目的は箕面公園と有馬温泉とであつたのである。箕面には山間動物園を造置、有馬温泉に行くまでに、終点宝塚に從來からの温泉とは別に、日本一の――その当時には実に日本一であつた――宏壯華麗な温泉経営に主力を注いだ。その結果、宝塚の繁昌は素晴らしい人気をよんで、殊に旧温泉側はどこまで発展するか、その指導と、その設計の如何によつては、恐らく四五年の間には、現在見るが如き田舎じみた小規模のものでなく、立派な湯の町が生れ得るものと期待し、その大きな夢の幻しを語りあつたものである。然るに彼らは宝塚発展の大局を忘れて、水道の権利だとか、元湯の使用権や、その分配の独占権だとか、四五人のボスが頑強なる自己主義と、俄かに値上りした地主の慾張りから、私達の希望は到底容れられない。あるがままの自然の発達――御覧の如き田舎めいた湯の町に終始したていたらくであるが、若しあの時に、私達の計画、元湯を二つに分けて、火力の熱を借りる温い湯と冷たい湯、冷たい湯といふのはをかしいが、元来、この温泉は冷泉であり炭酸泉で「カロール・ナトリウム」の多い、そしてまた大量に湧出する資源に恵まれてゐるから、先づ元湯を完全に確保し、高地にタンクを作つて湯槽を設け、即ち旧温泉としての大衆風呂と、各旅館毎に内湯を配給する、そしてもう一つ、冷泉炭酸風呂を新設する、これは会社が引受けてもよい、といふ大体のプランによつて、新しい宝塚を創設したいと、何度か話し合つたことであらう。然しすべてが空論に終つたから、私は武庫川原の埋立地を買収して、ここに現在の新温泉を作つたのである。」²³⁾

ここで小林は、既存の温泉街に対して共同による総合的な改善や修正を打診したが、既得権の扱いが懸案となり受容されなかったとしている。具体的には、元湯を二手に分けて一方を火力で温め旧温泉の大衆浴場と各旅館の内湯に引き、もう一方を「冷泉炭酸風呂」に引く計画で、この働きかけが不調に終わった結果、「武庫川原の埋立地を買収して、ここに現在の新温泉を作った」と括っている。また、同書別項では、同時期のものとして武庫川を堰き止めて風景美と船遊の便を創出する計画についても言及し、これも地元の不賛同等から実現していないとしている²⁴⁾。冒頭の「開通から半々年もたたぬ間」という記述を考慮すれば、新温泉開設前、明治 43 年初夏頃に地元との交渉が難航し、夏頃には箕有電軌による新温泉建設を実行に移したとも読める²⁵⁾。しかし、記述の曖昧さもあって、記された出来事それぞれの時期は判然としない。

一方、開業から 4 年近く経ち、1 ヶ月後に少女歌劇の公演を控えていた 1914（大正 3）年 3 月 1 日付で箕有電軌が発行、配布したと見られる文書『寶塚の繁昌策』にも、既存温泉街と共同での改善を進めようとしていた様子が窺われる²⁶⁾。箕有電軌側は、宝塚の更なる可能性を訴えつつ、西宝線の開通を控えて神戸方面からの集客が有るとはいえ、旧来的な方法では、思うように発達が難しいとして、1) 温泉地としてその設備の充実を図ること、2) 療養地としての真価を周知すること、3) 宝塚を住宅地又は別荘地としての側面を重視することの 3 策を掲げている。すなわち、温泉地としての発展のみならず、療養地、住宅地や別荘地といった旧来の温泉街とは別種の質を加え、郊外の環境を総合的に整えていこうとするものであった。このうち温泉設備に

については、新温泉に「歐米最新式の『土耳其風呂』、『電気風呂』等を新設」する、湧出する炭酸水を使い「炭酸温泉場」を新設する、既存・新設を問わず内湯を充実させる、「武庫川の清流を利用し各種の計畫を立案実行する」などと記されている。炭酸温泉場については、1915（大正 4）年発行の案内誌や 1914（大正 3）年 3 月から 1917（大正 6）年 8 月の『山容水態』に新設する旨が記され、同時期の新聞記事では、地元有志による開設計画について報じられている²⁷⁾。その後に発行される案内誌を見る限り、何れも実現は確認されないが、その当時、懸案が箕有電軌側と町民側の双方に共有されていたことは確かなようである。

また、『山容水態』の記事では、住宅地としての宝塚を示すにあたり、花柳街の存在が相応しくないという評に触れ、宝塚の資質の一部しか見ない妄断に過ぎないとしている²⁸⁾。温泉地としては花柳街を受け容れつつ、住宅地としての別の側面へ目を向けさせようとしており、ここでも宝塚の土地を両義的に捉える姿勢を見ることが出来る。

なお、配布文書には、開設翌年に建設された「パラダイス」の利用法について、準備中の少女歌劇を中心として各種余興を計画しているとしたうえで、地元からのアイデアを募る旨が付記されている。当時の新聞記事によれば、少女歌劇が当たる前の新温泉は、箕有電軌側は「畢生の努力」によってパラダイスの催しを考案していたとある²⁹⁾。宝塚は、1912（明治 45）年半ばから不況下にあった³⁰⁾。

また、阪堺電軌沿線の大濱潮湯をはじめとする類縁施設の開設ラッシュもあって客足が思うように伸びないことにも言及されている³¹⁾。例えば阪堺電軌による堺大濱の潮湯は、宝塚新温泉開業の翌々年 1913（大正 2）年 1 月の開設だが、浴場と喫茶店、余興場、食堂から成り、浴場の壁と床はそれぞれ大理石とミントントイルで仕上げられ、窓にはステンドグラスが嵌められていた。蒸気暖房の設備、家族風呂の併設もあって、宝塚新温泉と酷似する構成である。また、欧米の街並みを意識した大阪天王寺の新世界は、1912（明治 45）年に開業する。通天閣や遊園地ルナパークのほか、それを取り囲む 10 以上の興行館などから成る巨大な娯楽場であった。更にこの第二期工事として 1913（大正 2）年 6 月に竣工する噴泉浴場も「宏壮美麗なる洋館」で浴室には大理石の美人像があり、「蒸風呂」のほか、休憩室や演舞場、食堂等も併設され、宝塚新温泉に匹敵する設備であった。これらの施設は、当時の宝塚新温泉にとっての直接的な競争相手であったと言える³²⁾。

以上のような経営環境に対する危機感から、箕有電軌は、前記の繁昌策を地元提示したと考えられる。

前記した『逸翁自叙傳』に記された内容は、「冷泉炭酸風呂」と「炭酸温泉場」という違いこそあれ、『寶塚の繁昌策』の温泉開発に関する内容と符合する事項が多い。自叙伝を読み直せば、当該の記述は 1914（大正 3）年から数年間の出来事を指している可能性が高いだろう。もし、1910（明治 43）年春頃までに最初の提案があったとすれば、1914（大正 3）年 3 月にも再び同内容の『寶塚の繁昌策』が示されたことになる。

いずれにせよ、箕有電軌は、新温泉が開設されてもなお、1914（大正 3）年から 1917（大正 6）年頃までは、遊客数や経営上の不安定さがあり、地元との連携による宝塚の質的転換を模索していた。『逸翁自叙傳』の文脈と『寶塚の繁昌策』の存在を考えあわせれば、開業後も継続した働きかけが不調に終わったという帰結が、既存温泉街と

対峙するその後の新温泉を方向付けたと解釈できる。そして自叙伝中の「現在の新温泉を作った」という部分の記述は、交渉破談後に独自路線を進んだ結果として出現したその後の新温泉のありようを指していると見なすのが妥当であろう。

4. 『山容水態』等の記事に見る宝塚新温泉草創期における娯楽の質的变化

『山容水態』をはじめとする初期の新温泉を記録する史料を丹念に追跡していくと、開業後暫くの新温泉には、女性と子供を重視するといった一般に知られる方向性とは対照的な側面を見ることが出来る。新温泉開業の催しには、大阪南地芸妓の手踊りが行われ、芦辺踊り全七場が披露されていることが確認される³³⁾。1912（大正元）年 10 月の新聞記事には、「電気應用美人劇」、翌年の正月には「遊女會」のパラダイスでの開催が報じられている³⁴⁾。『山容水態』発行後には、芸妓手踊り、美人画展が何度かパラダイスにて催されることが宣伝されており、言わば成人男性向けの娯楽が新温泉に少なからず存在していたことが分かる。阪田寛夫は、こうした催事の幾つかを採り上げ、前記の著作で、婦人博覧会の催される 1913（大正 2）年以降、新温泉の営業方針がはっきり変わるとしているが、このような芸妓を招いての催しは、少なくとも 1913（大正 2）年 9 月、1914（大正 3）年の 2 月と 8 月に行われたと見られる³⁵⁾。1913（大正 2）年 10 月には東京より女優を招いて、「優美艷麗」さを「電光の應用」で魅せる見世物が興行されたと考えられる³⁶⁾。また、誌面においては、新温泉の娯楽に直接的に関係せずとも、芸妓の居る宝塚の湯の街や、芸妓手踊りの見物が肯定的に記述されている記事が少なくない³⁷⁾。誌面を見る限り、箕有電軌や宝塚新温泉は、1914（大正 3）年末頃までは花柳界に根ざす娯楽に寛容であったといえる。

しかし、こうした記述は、宝塚や電軌沿線に関連するものに限れば、1915（大正 4）年を境にほとんど掲載されなくなる。少なくとも広報誌上において、異なる方向性を示す記事の混在はこの時点で見受けられなくなり、方針の転換が一層明確になった様子を窺うことができる。

また、単に婦人や子供向けの清新な娯楽を推奨するだけでなく、これとは異なる娯楽のありようを批判的に述べたり、宝塚と対抗する行楽地や施設を具体的に引き合いに出し、箕有電軌による施設の特質を強調したりするものも見られる。具体的には、売春婦同様に見なされるようになった大正芸妓について批判的に言及されている³⁸⁾。また、施設を比較した記事では、前記した大濱潮湯や噴泉浴場、築港潮湯を対象に、家族風呂や脱衣所などが窮屈で殺風景なこと、内装が良くないこと、広告や混雑が過ぎることなどが批判され、新温泉の雰囲気や心地のよさが伝えられる³⁹⁾。こうした幾つかの記事は、箕有電軌が、旧弊的な娯楽から距離をとり、類縁娯楽施設と差別化することを施設経営の方針としつつあったことを傍証するものと位置づけられる。

変化の背景としては、まず、宝塚の少女歌劇が、花柳文化とは対峙する清新さを重視するものとして位置づけられつつあったことを挙げられよう。良く知られるように、1913（大正 2）年 3～5 月の婦人博覧会開催や、婦人化粧室や家族風呂の設置など、女性や家族連れを想定した清新な娯楽場への意識は早くから垣間見られる⁴⁰⁾。前記の箕面動物園でも子供が重視されていたが、女性や子供を顧客の対象として重視する理由については、少女歌劇のありようを通して明文化さ

れる。初期のものとして、1914（大正 3）年 12 月に、少女歌劇の大阪市内公演に際して述べられた小林一三の言辞がある⁴¹⁾。ここでは、娯楽が三味線等の旧来的な楽曲に限られている現状を指摘したうえで、小学校や女学校で学ぶ唱歌を基本にした少女歌劇の存在意義が述べられる。こうした内容は、1918（大正 7）年 8 月創刊の『歌劇』誌上で継続的に詳述され、しだいに定型の理論として定着していく⁴²⁾。概ね、少女歌劇を広く大衆に受け容れられる国民劇として成長させたい意向が述べられている。具体的には、それまでの国民劇に相当した歌舞伎が、花柳芸術あるいは花柳界文化を基底としていて、新しい大衆の時代にそぐわないとしている。すなわち、近代教育の結果、新しい感受性を備え、数を増しつつあった大衆向けの娯楽としては、西洋音楽を中心にした国民劇を、安価に見せることが望ましいとして、少女歌劇の意義を強調しつつ、その将来的な方向性について論じている。浸透しつつある近代教育を基礎に醸成される新しい文化を拡大していこうという戦略と言えよう⁴³⁾。すなわち、女性が隆盛する花柳界の女性像に対立するものとして、子供が新感覚を持つ今後の顧客層として、それぞれ位置づけられたと考えられる⁴⁴⁾。このように、少女歌劇のありようが見いだされるのと軌を一にして、新温泉における催事や『山容水態』の記事の傾向が変化している。

また、この間、そうした少女歌劇が人気を博し、経営的に軌道に乗りつつあったことも有利に働いただろう。1914（大正 3）年は、客の入りが随分と少なかったようだが、その年末に大阪北浜の帝國座及び神戸の聚楽館で行われた「年末記念歌劇会」では、初の有料公演に関らず、満員の盛況となる⁴⁵⁾。その後、1915（大正 4）年以降の新聞記事でも、次第に人気と存在感を増し、経営的な安定をも確保しつつあった様子を窺えるのである⁴⁶⁾。

新温泉は、開設後暫く、性的刺激に訴える旧来的で成人男性向けの娯楽に寛容で曖昧な姿勢を取っていたが、少女歌劇の興行において、箕有電軌もしくは小林が当初から持ち合わせていた清新な娯楽への志向性が高められ、同時に経営上の見通しが立つという判断が可能となった結果、方針を修正したものと考えられる⁴⁷⁾。

5. 『歌劇』等の記事に見る小林一三の類縁娯楽施設に対する見解と宝塚新温泉における経営方針の明確化

『山容水態』が終刊する 1917（大正 6）年以降は、1923（大正 11）年の運動場開設に至るまで、宝塚の施設的な改変は、箕面から公会堂を移設する以外に認められない。事実、少女歌劇の上演日数や演目数は、この期間に著しく増加しており、少女歌劇を如何に発展させるかということが、以降の主要な課題であったものと思われる⁴⁸⁾。

宝塚に関する小林の言説も、回顧談として後年に書かれたものを含めて、少女歌劇に関するものが殆どである。ただ、その中でも、数は少ないが、娯楽施設のあり方について言及されるものを、まず、少女歌劇の脚本に認めることが出来る。1917（大正 6）年に上演された『夜の巷』は小林一三の作品で、同年彼の歌劇作品を纏めた『歌劇十曲』に所収されている⁴⁹⁾。ここでは、宝塚が、「青年士女が一堂に集まる機会が多く」て「危険が伏在する」場所とされることに対して、「寶塚の経営は、一家族打連れて遊びに行けるやうに、高尚に、家庭本位に、清新なる娯楽場」と、その安全性を主張している。さらに、新世界ルナパークや千日前楽天地といった大阪市内の代表的な類縁娯楽施設を、「パチルスのくついたあんころ」か「不衛生の牡丹餅」とい

うように、不浄な場所として扱っている。事実、1915、1916（大正 4、大正 5）年の新世界では、事業不振のために花柳街的な要素が導入されるとともに、新世界の一部であるルナパークもそれに合わせて純洋風を和風の設備に改造されている⁵⁰⁾。パチルスや不衛生という表現は、こうした青年子女や家庭向けではない施設の方向性を指していると捉えられる。

また、当時の記述を見ると、類縁施設において、風紀上の問題があることが認識されていたことを理解できる。例えば、箕有電軌に先駆けて阪神間に路線を敷設していた阪神電鉄がその経営を支援し、夙川に立地した遊園地・香爐園は、動物園、博物館のほか、奏楽堂、ウォーターシュート、メリーゴーラウンド、運動器具が設置され、子供や家族向けの施設と見ることもできるが、同じ敷地内には、恵比寿ホテルという宿泊施設や飲食店が数多く存在し、数十人の芸妓を擁して、成人男性向きの遊興的な娯楽にも供していた様子を窺える⁵¹⁾。明治末の新聞記事には、園内での客と芸妓の同衾や、異種の娯楽要素が混在する環境への非難が報じられている⁵²⁾。神戸の郊外保養地として知られた須磨遊園とされる一帯に属する料亭旅館でも、芸妓と客の同衾が取り締まられたという記事が見られる⁵³⁾。更に、1918（大正 7）年には、多数の学校が立地する神戸東山に温泉浴場を核とする「遊園地」の新設が企画された際に、芸妓の出入りや彼女たちによる歌舞音曲の可否が問題となり、連日にわたって紙面を賑わせている⁵⁴⁾。すなわち、その当時、神戸近辺においても、新温泉と類縁の娯楽施設と花柳界の関係は、風紀上の課題として一般に認識されつつあったと見られるのである。小林をはじめ箕有電軌側の娯楽施設経営における姿勢も、こうした当時の常識を踏まえたものであったと考えられる。

小林は、前記したような宝塚や少女歌劇に対する風評に神経質であったようで、大正末から昭和初頭の『歌劇』誌上には、少女歌劇を担う宝塚音楽歌劇学校の生徒や父兄に対して、少女歌劇に対する理解と生活態度の向上に常日ごろ努めるよう訴える趣旨の記述を幾度か認めることが出来る⁵⁵⁾。宝塚の生徒の品行に対する批判的な視線も新聞記事から読み取れる⁵⁶⁾。その当時、芸妓達も芝居を公演したり、宝塚少女歌劇がそうしたように、近代的な学校をモデルにした組織の下で芸事を学んだりしており、少女歌劇の生徒らが、芸妓と混同されかねない状況は実際に存在していた⁵⁷⁾。

そして、こうした外部からの誤解や類縁施設に対する社会からの視線、少女歌劇に関する考えの整理と深化が、新温泉の次期開発を促し、施設の方向性を定める一因となっていることが、1923（大正 11）年に小林によって示された「生徒と其父兄へ」という記事から理解される。ここでは、少女歌劇に対する社会の評価が一部で適切でないことに言及し、そうした批判的な意見には、自らを律することで理解を得ようという小林の意志が歌劇学校生徒とその親に向けて伝えられている。さらに、この姿勢が、大正末以降から継続する宝塚の施設展開に関しても重要な意味を持つことを示唆している。

「寶塚をして阪神間の唯一の純潔なる、高尚なる、そして一家打ち連れの行楽に最もふさはしい遊覧場たらしむるにあるので、寶塚舊温泉方面は舊來のまゝ自然の發達におまかせずとして、新温泉側は理想的に建設することにしてある即ち運動場、遊園地、テニスコート、植物園、簡易圖書館、大歌劇場、等統一した計畫のもとに進行したいと思つてゐる、そして、武庫川の北岸即ち新温泉側は藝妓や遊び人とは没交渉にしたい、こ

れは既に其筋に會社の意見を陳情してゐる、そして、家庭的に完全なる遊覽場たらしめるのであるから、學校の先生方も、大阪神戸近郊の各遊覽地に比較して、又、道頓堀や千日前の活動寫眞館や見世物小舎に比較して、矢張り寶塚が家族的行樂には、一番よい所である、といふ考が自然に浮んでくる、公平な判斷をする、今日寶塚は歌劇があるからイケないといふやうに考へて居る人々をして寶塚大賛成と言はしめるやうに、其實質を皎潔に外觀を清新にしなければいけない、」⁵⁸⁾

すなわち、對外的な誤解や不本意な風聞を招かないために、「實質」である少女歌劇の生徒の品行に気を配るとともに、「外觀」では、武庫川を挟んで対峙する旧温泉と対照的な清新な娛樂地帯を形成することが家庭的娛樂場として成功する手段としている。このことから、芸妓や遊び人の跋扈する花柳街としての旧温泉と新温泉や少女歌劇のあり方が、一部の人々には混同されていた状況を小林が認識しており、彼はそうした虚聞を、都市スケールの空間的な操作によって修正しようとしていたと捉えられる。すなわち、宝塚に新設の娛樂施設が、少女歌劇のイメージ形成や改善に資するという意味において展開された側面のあることを指摘できる。そして、ここにおける旧温泉の花柳街的な娛樂のあり方と新温泉の方針との間の対立軸は、問題の水準が異なるとはいえ、花柳芸術の代表とされた歌舞伎と西洋的趣味を加え、新時代の芸術を標榜しようとしていた少女歌劇の間に設定された対立軸と相似の關係に あつたと捉えられる。

1929 (昭和 4) 年にも、次のように、対岸の既存温泉街とは別の方向性を採る意志を伝えている。改めて、此岸の新温泉を既存温泉街から切り離して別の方向性で發展させようとしている。

「私は、寶塚の地をしてあらゆる藝術の神の宿る、山紫水明の學園を大成して見たいと考えてゐる。緑の松の林には文藝圖書館のクラシックの建物が靜に立つてゐる。四季の花の色香の絶えざる植物園に隣りして和洋の建築は何と言ふ名稱の音樂學校であらう。グラウンドの周圍には幾棟の校舎が茂れる樹の間に點在してゐる。何といふ女子大學であらうか……私の夢は、それからそれと、寶塚をして民衆本位家庭本位の純潔なパラダイスとして大成せしめやうと想つてゐる。武庫川を隔てゝ湯の町の寶塚には、時代的色彩のあるがまゝに輝く事に就て、私はこれに干渉する權利を持たない、せめて此新温泉を中心にした一帯の樂園は民衆のものとして家庭本位に大成せしめたい。」⁵⁹⁾

ここではさらに、新設の娛樂施設に、學園のような一種の教育機關としてのイメージを重ねている点に着目すべきであろう。さらに、1930 (昭和 5) 年には、

「少女歌劇の生徒達を、可愛い、純白の、いとしい少女として育てる如くに、と彼を思ひこれを思ふと、此寶塚を大成せしむる爲めにはまだいろいろの計畫が不實行であることに心付く。沿道の學生の爲めには、靜かな圖書館がほしい、寶塚の本來の使命から文藝を中心にした圖書館がよいかもしれない。地方の青年の爲めには、宿泊の出来る青年會館がほしい」⁶⁰⁾

として、教育機關として必要な設備をより具体的に構想している。このように、飽くまでも、新温泉の中心には歌劇が存在し、少女歌劇と宝塚新温泉の娛樂施設のあり方が、強く関連づけて繰り返し語られ

ていることが解る。したがって、少女歌劇における女性と子供との位置付けは、新温泉の娛樂施設全体において敷衍されていたと捉えることができるだろう。

概観する限り、事前に述べられた新規の開発計画は着実に実行に移されていったことが確認される。植物園、文芸図書館等が竣工し、小林の言葉に示された計画が概ね完遂して全貌を見せ始めた 1932 (昭和 7) 年に、婦人子供博覧会が開催されたが、これは、阪急創立 25 周年を記念した大規模なもので、「外觀」となる大娛樂場の完成を知らしめるものであつたと見なせよう (図 1)。

図 1 『阪急創立廿五周年記念 寶塚婦人子ども博覽會々場全景圖』

6. 結び

以上をまとめると、宝塚新温泉における経営方針の形成過程は、次のように捉えることができる。

まず、箕有電軌あるいは小林一三は、早い時期から、子供と女性、家族を重要な遊客と認識していたと見られる。それは、1910 (明治 43) 年に開園した箕面動物園のあり方や、宝塚新温泉における 1913 (大正 2) 年以降の催事等から知ることが出来る。しかし、当初は、遊客数の不安定さもあつてか、成人男性を対象として花柳界を意識した娛樂も見られた。また、開設前後の草創期は、既存温泉街に対して、宝塚全体の環境を変質させようと働きかけており、方向性を模索する時期が続いたと言える。

そうしたなか、1915 (大正 4) 年頃に少女歌劇が成功し、続いて地元との協議が不調に終わったことが契機となり、花柳界やそれに付随した娛樂、類縁施設と対峙する方向性を次第に先鋭化させていったと考えられる。箕面動物園の撤退もこの時期に重なる。岩下清周の社長辞任とそれに伴う小林の専務への格上げが同時期であつたことも手伝つたと思われる。そうした先鋭化の延長として、同時に、花柳街を基調とする既存温泉街とは明確に対峙し、清新であるべき少女歌劇の舞台として相応しい遊園地の空間を求めた結果、昭和初期に至り、學園としての遊園地という具体的なイメージが提示されるに至った。

宝塚新温泉は、対岸にある花柳文化から成る既存温泉街を意識し、それに対峙する新時代の女性や新しい世代である子供を象徴する少女歌劇のあり方を基軸にすることで、その方向性を見いだした。そして、その關係を意識的に都市的な環境にまで反映させることで拡張や

設備の更新がされていったと捉えられる。換言すれば、昭和初期までに形成された宝塚の街は、明治末以降に顕れた女性や子供の社会的な位置づけの変化が、武庫川を挟んで空間化されたような場所であった。

こうした開発者側の意志を伴って展開された宝塚新温泉に実現された諸種の施設や設備が、具体的にどのような建築や空間を提供し、利用されていたのかについては、本稿の結果を踏まえつつ、次稿において明らかにしたい。

謝辞

以上を纏めるにあたっては、宝塚市史資料室（当時）倉橋滋樹氏と同室の七條美樹氏、阪急学園池田文庫（当時）田畑きよ子氏ほか多くの方々のご助力を賜った。この場を借りて謝意を表する。また、本研究の一部は、科学研究費補助金による成果であることを付記す。

注

- 宝塚新温泉に影響された施設としては、大阪近郊では、阪神パーク、あやめ池遊園地が挙げられる。そのほかの地域では、東京の多摩川園や京王閣多摩川原遊園、横浜の花月園、別府の鶴見園などが該当する。
- 宝塚新温泉は、開園 50 周年を記念して 1960（昭和 35）年 3 月 20 日に「宝塚ファミリーランド」と改称する。新名称は公募による。その後経営が続けるが、2003（平成 15）年 4 月 7 日を以て営業を終了した。跡地は、超高層マンション、住宅展示場、関西学院初等部等に代わられたが、植物園の部分が宝塚ガーデンフィールズとして残され、遊園地当時の面影を残していた。しかし、このガーデンフィールズも 2013（平成 25）年 12 月 24 日に閉鎖され、翌月には、旧文芸図書館の建物も取り壊された。
- 小林一三『逸翁自叙傳』産業経済新聞社 1953（昭和 28）年
- 津金澤聰廣『宝塚戦略 ―小林一三の生活文化論―』講談社 1991（平成 3）年、竹村民郎『笑楽の系譜 ―都市と余暇文化―』同文館出版 1996（平成 8）年、竹村民郎『大正文化帝国のユートピア ―世界史の転換期と大衆消費社会の形成―』三元社 2004（平成 16）年など
- 阪田寛夫『わが小林一三 ―清く正しく美しく―』河出書房新社 1983（昭和 58）年
- 川島智生「宝塚新温泉の成立とその建築について ―小林一三の理念と新しいビルディングタイプの誕生―」市史研究紀要たからづか 第 19 号 2002（平成 14）年 11 月
- 松本佳子「昭和初期の阪神間郊外住宅地における女性の社交活動 ―宝塚女子青年会を例に―」日本建築学会計画系論文集 第 516 号 1999（平成 11）年 2 月
- 拙著『明治・大正・昭和初期の日本における遊園地の概念と実態 ―近代都市における娯楽施設の成立に関する研究―』学位論文 2000（平成 12）年 3 月、拙論「遊園地・宝塚新温泉が形成した娯楽空間の史的理解」市史研究紀要たからづか 第 20 号 2003（平成 15）年 11 月
- 営業報告や社内報など、当時の阪急の経営史料については、社外者の閲覧は許可されない。また、小林一三の日記は『小林一三日記』（阪急電鉄株式会社 1991（平成 3）年）として刊行されているが、阪急を率いた時代が欠如している。なお、営業報告の一部は、国立公文書館で閲覧できるほか、筆者個人で所蔵する分は通覧している。
- 『山容水態』と号する出版物としては、雑誌のほか、1912（大正元）年 9 月に発行された沿線の写真集が存在する。雑誌としての第 1 巻第 1 号は、1913（大正 2）年 7 月に発行されている。以降、1916（大正 5）年 9 月の第 3 巻第 12 号までがナンバリングされ、1914（大正 3）年（発行月不明）と 1917（大正 6）年 8 月は臨時号として発行されている。写真集を除いて、少なくとも 39 号分が発行されたと見られるが、第 3 巻第 6 号は池田文庫にも所蔵が無い。
- 小林一三は、1873（明治 6）年 1 月 3 日山梨県韮崎市に生まれる。1888（明治 21）年慶應義塾大学に入学し、1892（明治 25）年に同学を卒業、1893（明治 26）年に三井銀行に入社する。1907（明治 40）年に同行を退社し、箕面

- 有馬電気軌道株式会社追加発起人となり、同年のうちに、同社専務取締役
- に就任する。以降は、同社を牽引し、1927（昭和 2）年には改称した阪神急行電鉄株式会社の社長に就任。1940（昭和 15）年には、第二次近衛内閣の商工大臣として国政に関与した。戦後は幣原内閣で国務大臣兼戦災復興院総裁に就任するが、間もなく公職追放となる。1957（昭和 32）年 1 月 25 日に急性心臓性喘息のため急逝。なお、岩下清周とは小林が三井銀行阪支店在勤時に岩下が支店長として赴任することで出会っている。
- 主に池田文庫ならびに宝塚市立図書館に所蔵される史料を活用している。
 - 会社が継続的に作成したと見られる昭和初期までの宝塚に関連するスクラップブックの台帳は、46 冊あり、台帳名には「宝塚歌劇」、「宝塚新温泉」、「宝塚国民座」「宝塚女史青年会館」、「宝塚大劇場火災」「宝塚雑」「宝塚広告」「芸能」の分類がある。大阪毎日新聞、大阪朝日新聞のほか、神戸又新日報、国民新聞、大阪都新聞など、多くの新聞を対象にしており、年代は不明のものもあるが、1923（大正 12）年 1 月から 1949（昭和 24）年 4 月までの記事が確認される。
 - 『京阪神急行電鉄五十年史』京阪神急行電鉄株式会社 1959（昭和 34）年による。宝塚新温泉が拡張していく過程でルナパークなどの子会社が作られたほか、音楽歌劇学校などの組織も経営に関係したが、実質的には電鉄会社を率いる小林がこれを統括していたと見られる。なお、箕面有馬電気軌道株式会社は、1913（大正 2）年 2 月に阪神急行電鉄株式会社と社名を変更する。さらに 1943（昭和 18）年 10 月に京阪神急行電鉄株式会社に、1973（昭和 48）年 4 月に現社名となった。また、1908（明治 41）年下期から 1914（大正 3）年上期の取締役社長は岩下清周、1914（大正 3）年下期から 1924（大正 13）年の下期までの社長は平賀敏であった。とりわけ、岩下が社長であった頃の小林の立場は、両者の年齢や経験差を考慮すれば、大正半ば以降に比べて強固なものではなかったと考えられる。
 - これは、その 2 つの時期の間で設備更新が乏しかった結果とも言える。1914（大正 3）年、岩下清周に対する攻撃記事が出るようになり、北浜銀行事件に発展する。また、1916（大正 5）年から 1917（大正 6）年には神戸線実現の鍵となる灘循環軌道の敷設権をめぐる攻防があったことが知られる。また、折からの不景気も重なって、大正初頭の箕面電軌の経営は、苦難が続いていた。新温泉での設備更新が、1914（大正 3）年以降に乏しくなる背景には、こうした事情も少なからず関係したと考えられる。
 - 『阪神急行電鉄二十五年史』阪神急行電鉄株式會社 1932（昭和 7）年
 - 『第拾回報告書 自明治四十五年四月一日至大正元年九月三十日』箕面有馬電気軌道株式會社
 - 『阪神急行電鉄二十五年史』等では、1916（大正 5）年 3 月末日を以て廃止とされるが、「櫻花爛漫たる春の箕面」『山容水態』第 3 巻第 9 号 1916（大正 5）年 5 月の記述からは、箕面駅近くの公会堂や運動場の近辺に適宜鳥獣舎が造られ、動物が移され、観覧に供していた様子を窺える。
 - 前掲 阪神急行電鉄株式會社、小林一三『宝塚漫筆』実業之日本社 1955（昭和 30）年などを参照。
 - 「寶塚より」大阪朝日新聞神戸附録 1910（明治 43）年 10 月 4 日、「寶塚より」大阪朝日新聞神戸附録 1910（明治 43）年 11 月 18 日
 - 大林組社史編集委員会編『大林組百年史 資料編』株式会社大林組 1993（平成 5）年
 - 「箕有電鐵と沿線（四）」大阪毎日新聞 1910（明治 43）年 3 月 7 日、「寶塚の昨今」大阪朝日新聞神戸附録 1910（明治 43）年 9 月 15 日、「寶塚より」大阪朝日新聞神戸附録 1910（明治 43）年 9 月 29 日、「寶塚より」大阪朝日新聞神戸附録 1910（明治 43）年 11 月 18 日、「新しき寶塚浴室」大阪朝日新聞神戸附録 1911（明治 44）年 3 月 3 日、「寶塚の賑ひ」大阪朝日新聞神戸附録 1911（明治 44）年 3 月 31 日
 - 前掲、小林一三『逸翁自叙傳』 202-203 頁
 - 同上、210-211 頁「私達は新温泉を建設すると共に、今の西宮線鉄橋あたりに、一段の堰堤をつくつて上流旧温泉あたりまで一面の貯水域を築き、風景の美と船遊の便と、一挙兩得、理想的観光地として計画したけれど、惜むらくは其兩岸が埋立地であるために浸潤湧水、湿地として埋没するといふので、中止せざるを得なかつたが、若し紅葉谷支流附近の岩盤から上流を堰止めて貯水するものとせば、茲に山峡の瀬何町から出来、生瀬鉄橋あたりまで船楫自在の便を得、其兩岸の地域は宝塚一等地として新局面を開

- き、こゝに寿楼を中心として、炭酸温泉を囲む湯の町が生れるものと信じてゐる。」とある。
- 25) 文中「宏壯華麗な温泉」とは明らかに宝塚新温泉であり、その経営の結果として、交渉が難航したとも読めるため、俄には断定しがたい。これ以降の段落で、小林は、「事件」として、有馬温泉側から宝塚-有馬間の鉄道敷設特許を放棄するよう働きかけてきたことを挙げている。それを考慮すれば、「開通後半ヶ年もたたぬ間」の「トラブル」とは、この特許放棄問題を指し、開発方針を巡る既存温泉街との軋轢ではないと考えられる。
- 26) 『寶塚の繁昌策』箕面有馬電気軌道株式會社 1914 (大正 3) 年 3 月 1 日。「第一 寶塚の眞價」「第二 如何にして寶塚を繁榮ならしむるべきか」「附言」で構成される。「第一 寶塚の眞價」では、『山容水態』の記事の名称と同様である。ここでは、清流をはじめとする風光に恵まれた地勢、温暖な気候、温浴設備が開発された宝塚の更なる発展の可能性と、さらなる繁榮を求め、町民に協同を呼びかけている。「第二 如何にして寶塚を繁榮ならしむるべきか」においては、遊覧地のみならず、別荘地住宅地としても発達を目指すべきとして、西宝線の開通を控え、繁榮策の研究を呼びかけつつ、「寶塚をして關西唯一の大温泉場たらしむること」「養生地としての眞價を知らしむること」「寶塚をして住宅地たらしむること」に分けてそれぞれの具体策を提示している。「附言」においては、パラダイスにおいて少女歌劇他の余興を予告しつつ、パラダイスの利用法の研究を求めている。
- 27) 炭酸泉浴場の計画については、吉岡重三郎『梅田より箕面寶塚へ』箕面有馬電気軌道株式會社 1915 (大正 4) 年に見られる。新聞では、「寶塚の新計畫」大阪朝日新聞神戸附録 1915 (大正 4) 年 6 月 12 日、「寶塚より」大阪朝日新聞神戸附録 1915 年 (大正 4) 10 月 24 日、「寶塚新浴場計畫」大阪朝日新聞神戸附録 1916 年 (大正 5) 7 月 10 日、「寶塚より」大阪朝日新聞神戸附録 1916 (大正 5) 年 7 月 14 日で報じられている。『山容水態』でも、1914 (大正 3) 年 3 月の第 1 巻第 9 号から 1917 (大正 6) 年 8 月の臨時住宅特集号まで 4 度掲載される「寶塚の眞價」と題する記事で言及されている。
- 28) 「寶塚の眞價 遊覧に療養に住居に好い」『山容水態』第 1 巻第 9 号 1914 (大正 3) 年 3 月「寶塚は遊樂の地である山水共に勝れた地ではあるが、住居としては少しく眞面目ではない、と云ふやうな言は屢々聞くところ然しソナナことを云ふ人は寶塚の小局部を見て大観しない人で、共に實際を語るに足らぬ人と想ふ、成程實驗に依れば大抵の人は停留所より新温泉道を傳ふて迎賓橋を南に渡り西に舊寶塚の市街に出で蓬萊橋を渡るか或は又逆に此道筋を通つて入浴なり食事をして還えるが之は僅に其一部温泉を中心とした湯の街、旅館料理屋の街に過ぎぬのである故に時には妖かしい人も通る、喧しい三味の音も響く、此の一角を見て全体が不眞面目であると云ふに至つては甚だ妄斷であると云はねばならぬ」とある。
- 29) 「寶塚より啓上」大阪朝日新聞神戸附録 1914 (大正 3) 年 2 月 18 日に、「寥々たる哉寥々たる哉當地の近狀や、世を通じての不景氣に原因するか將又當地のみ爾く不景氣なるか开は忽ちに斷言するを得ず候へとも昨年以來追ッ通しの寂しさを見ては將來のほども奈何と推せられて寒心に堪へざるもの有之候 ▲さはれ此の寂寥の中にも箕有會社のみは相變らず畢生の努力を以て遊客吸引策に汲々とし時々例のパラダイスに於て何等かの催しを欠かさず候扱も根氣の盡きぬことかな」とある。
- 30) 「寶塚の新年」大阪朝日新聞神戸附録 1913 年 (大正 2) 年 1 月 6 日には「當地が新年に入るも猶斯くの如く寥々たる所以は、寶塚なるものが既に世人に飽かれたるにも因るべく、將又世を通じての不景氣にも因るべからむも、されど今一段の原因は諒闇中各自謹慎の結果たることは何人も疑はざる所に候。」とあるように、当時の記事の宝塚からの報告は不況を伝えるものが目立つ。
- 31) 「寶塚より啓上」大阪朝日新聞神戸附録 1913 (大正 2) 年 7 月 22 日
- 32) 傍士定治編『大阪新名所新世界通天閣寫眞帖』大阪土地建物株式會社 1913 (大正 2) 年 6 月、徳尾野有成『新世界興隆史』新世界興隆史刊行會 1934 (昭和 9) 年、『南海鉄道発達史』南海鐵道株式會社 1938 (昭和 13) 年などを参照。なお、新世界の噴泉浴場では、家族風呂も計画されていたが、当局の意向により実現しなかった。このほか、浴場施設を備えた枚方遊園、演芸場や展望台等から成る都市型複合娯樂施設・千日前樂天地、浴場を中心とした築港潮湯がそれぞれ 1912 (大正元) 年、1914 (大正 3) 年、1914 (大正 3) 年に開業している。

- 33) 宝塚新温泉の開業広告 1911 (明治 44) 年 5 月 1 日 池田文庫蔵
- 34) 「寶塚より」大阪朝日新聞神戸附録 1912 (大正元) 年 10 月 26 日、「寶塚の新年」大阪朝日新聞神戸附録 1913 (大正 2) 年 1 月 6 日
- 35) 「觀月電車の大割引」『山容水態』第 1 巻第 3 号 1913 (大正 2) 年 9 月に「パラダイスにては壽々女會の連中五十餘名總出にて今朝より繰込み得意の演藝に腕を揮ひ夜間は寶塚檢番美人總出にて今回特に仕組みたる舞踊「玉うさぎ」其他を電氣應用にて觀覽に供することゝなり居れば艶麗無比の大美觀を呈すべし」、「節分と恵方 電車運賃大割引」『山容水態』第 1 巻第 8 号 1914 (大正 3) 年 2 月に「尚又寶塚パラダイスにては實檢の藝妓總出にて花やかな舞踊其他の余興を催ふし美しい所を御覽に入れて觀客諸君をアツト云はせることに爲り居ればお詣りかたがた續々御出掛あるべきものなり」、「寶塚納涼會」『山容水態』第 2 巻第 2 号 1914 (大正) 3 年 8 月 に「パラダイス余興場にて大阪各遊廓藝妓の舞踊會を催し」とある。
- 36) 「美人劇と大活動寫真」『山容水態』第 1 巻第 4 号 1913 (大正 2) 年 10 月
- 37) 例えば、宝塚の煙火競技大会と川開きの際や、附近の中山寺での絵馬堂落成式において芸妓が繰り出すことが宣伝され(「寶塚川開と煙花競技大會」『山容水態』第 1 巻第 2 号 1913 (大正 2) 年 8 月、「觀月電車の大割引」『山容水態』第 1 巻第 3 号 1913 (大正 2) 年 9 月などがある。また、新温泉のものは明記されないが、男が家族温泉での逢引を回想する場面が描かれる記事(「見返橋と丁字が瀧」『山容水態』第 1 巻第 12 号 1914 (大正 3) 年 6 月)、宝塚の魅力のひとつとして芸妓の優艶さを挙げたうえで、彼女達を買春することが電車の開通で容易になったことを郊外開発の功利とする記事(蛸來舎主人「電車のお蔭じや」『山容水態』第 2 巻第 6 号 1914 (大正 3) 年 12 月) もある。
- 38) 例えば、「藝妓の群れから」と題する 6 回の連載では、売春婦同様に見做されることもあった大正初期の芸妓の墮落ぶりを指摘したうえで、接待役の本職としての本来的な芸妓のあり方を論じている。この連載は、正太夫という偽名の執筆者によるものであるが、連載の初回で、「藝妓論を書けと命令が下る」とあつて、箕有電軌に依頼されたものであることが推察される(『山容水態』第 3 巻第 1 号 1915 (大正 4) 年 7 月〜第 3 巻第 7 号 1916 (大正 5) 年 1 月 第 3 巻第 6 号は欠号)。
- 39) 大國壽郎「電車湯めぐり」『山容水態』第 2 巻第 12 号 1915 (大正 4) 年 6 月)。批判の対象となっているが、大濱潮湯は辰野・片岡事務所が手がけたもので、家族浴室にはアールヌーヴォー的な要素も見られる。噴泉浴場の意匠は、新温泉パラダイスに似たセセッション風で、何れも意匠上は新しいデザインの建築である。
- 40) たとえば、「寶塚の眞價 遊覧に療養に住居に好い」『山容水態』第 1 巻第 9 号 1914 (大正 3) 年 3 月には、「パラダイスには毎日清新の余興あり」とある。また、1915 (大正 4) 年 3 月に家庭博覧會、1916 (大正 5) 年 3 月に芝居博覧會が開催されている。初期の宝塚新温泉の様子は、『山容水態』の記事のほか、大久保透『最近の大阪市及其附近』大久保透 1911 (明治 44) 年、藤井忠徳『寶塚案内誌』たから新聞社 1913 (大正 2) 年、吉岡重三郎『梅田より箕面寶塚へ』箕面有馬電気軌道株式會社 1915 (大正 4) 年から知ることが出来る。
- 41) 小林一三談「少女歌劇の趣旨」大阪毎日新聞 1914 (大正 3) 年 12 月 9 日に「幼稚園を初め小學校女學校を通じて教へらるゝ唱歌と云うふものは、總てピアノ、オルガン、ヴァイオリン等に伴ふ洋樂ばかりで、現代の我國民の藝術的趣味の源泉が全然この洋樂から湧出しているといふには何人も異存あるまい。しかるにその少年少女が學校を離れると同時に、この洋樂趣味を味つたり、楽しんだりする機會がなくなつて、三絃を主とした長唄、清元、常磐津、義太夫などの俗謡を中心とした全く別個の藝術に接觸することばかりが多くなり、夢我夢中で其を賞美するやうになつて仕舞ふ。これは實に教育と矛盾した話で、折角の長き教養は無價値に終らせる次第であります。で此の洋樂趣味に立脚した音樂と舞踊との聯合した「オペラ」を世に紹介して社會の趣味的缺陷を補ふと同時に、少年少女や、青年男女達に一種の情味ある趣味的資料を提供しやうと考へたのが抑も歌劇團組織の主意で、… (後略)」(吉岡重三郎編『寶塚少女歌劇廿年史』寶塚少女歌劇團 1933 (昭和 8) 年 9 頁参照) とある。なお、これとほぼ同時期に掲載された「歌劇とはどんなものですか」『山容水態』第 2 巻第 6 号 1914 (大正 3) 年 12 月においても、同じような内容の記述が見られる。

- 42) こうした内容は、小林一三の自著『日本歌劇概論』寶塚少女歌劇團出版部 1923 (大正 12) 年に纏められることになる。
- 43) 事実、『大阪府統計書』を通覧すると、学齢期 (6 歳-13 歳) にある児童の就学率は、1908 (明治 41) 年に 95%を越え、大正初頭以降は、就学する児童の総数も急激に増加していくことが解る。
- 44) 顧客としての女性と子供の重視は、女性や子供でも享受できる娯楽を重視するという意味で、男性を対象にしないという意味ではない。それまでの娯楽が花柳界など、主に成人男性を対象とした要素が強いことの対立軸であったといえる。子供や女性が来れば、夫なり相手なりの男性も同伴することになる。小林あるいは箕有電軌は、女性、子供、男性のいずれかを選ぶと言うより、そうした新しい娯楽の方向性へのシフトを志向していたと考えられる。
- 45) 『宝塚歌劇五十年史』宝塚歌劇団 1954 (昭和 29) 年
- 46) 「寶塚の昨今」大阪朝日新聞神戸附録 1915 (大正 4) 年 4 月 21 日には「餘興の少女歌劇も美しいといふので人気が可いやうだ」、「寶塚より」大阪朝日新聞神戸附録 1916 (大正 5) 年 5 月 7 日には「少女歌劇の如き、一寸場を取損へば観ること出来ざる有様なり ▲殊に歌劇は芝居博覧會以上の人氣を集め、今度こそは一般看客よりヤンヤの讃辭を浴びせられ居れり」、「寶塚より」大阪朝日新聞神戸附録 1916 (大正 5) 年 8 月 15 日には「新温泉場内の少女歌劇は相變らず好人氣にて開演毎に相當の看衆あり様々の美しい少女の演技に看客は汗自から収まりて涼氣場内に満つとの評あり」とある。
- 47) このほかに、沿線住宅地化の進捗が関係したことも考えられる。箕有電軌は、『山容水態』誌上において、これら沿線の住宅地を、水と空気が清澄で、他の沿線郊外よりも新興で地価が安いことを強調しながら、住宅地においても「清新」を重視していた。すなわち宅地化の進捗は、花柳界的な側面と対峙するものであった。なお、当初の主要な住宅地は、池田新市街 (明治 43 年)、桜井 (明治 45 年)、岡町 (明治 45 年)、豊中 (大正 3 年) であり、明治末から大正初頭にかけて販売が開始され、その後も各住宅地で住宅販売が継続される。1917 (大正 6 年) 8 月の『山容水態』においても、未だ上記住宅地の販売は完了しておらず、池田新市街はほぼ売却されつつあるが二十数画を残し、桜井での売却済みは半数程度となっている。また、検討内容から見る限り、小林あるいは箕有電軌は、当初から清新さへの志を持ち合わせていたと見られるが、それを的確に表現し、その後の成長を確信できる方法論までは、持ち合わせていなかったのだろうと考えられる。それは、少女歌劇での実践や試行錯誤を踏まえて慎重に獲得されていったものと捉えられる。
- 48) 『宝塚歌劇五十年史』宝塚歌劇団 1964 (昭和 39) 年
- 49) 小林一三『歌劇十曲』玄文社 1917 (大正 6) 年。歌劇の脚本は、当初、東京から招聘した安藤弘がそのほとんどを手掛けていたが、小林一三が自ら作品を提供することも少なくなかった。
- 50) 徳尾野有成『新世界興隆史』新世界興隆史刊行会 1934 (昭和 9) 年
- 51) 大久保透 『最近の大阪市及其附近』大久保透 1911 (明治 44) 年
- 52) 香櫨園での客と芸妓の同食については、「香櫨園のドンドン」大阪朝日新聞神戸附録 1908 (明治 41) 年 1 月 26 日、「脱營兵の新婚旅行」大阪朝日新聞 1908 (明治 41) 年 7 月 4 日、「香櫨園のドンドン」大阪朝日新聞神戸附録 1911 (明治 44) 年 12 月 19 日などで報じられている。また、「香櫨園めぐり」神戸又新日報 1911 (明治 44) 年 5 月 10 日は、婦人記者による記事で、「園内は廣くつて藁や紫雲英が咲いて如何にも好い遊び場だが如何はしい料亭が彼方此方に陣を構えて晝間から爪弾きの音などか聞えるなどはチト考へものだ」と括っている。
- 53) 「須磨花月の夜嵐」大阪朝日新聞神戸附録 1917 (大正 6) 年 2 月 9 日
- 54) 「男女學校の中庭に淫蕩地が出来る」大阪朝日新聞神戸附録 1918 (大正 7) 年 3 月 16 日、「遊園地計畫を打破せよ」大阪朝日新聞神戸附録 1918 (大正 7) 年 3 月 19 日、「發起人は連袂辭職せよ」大阪朝日新聞神戸附録 1918 (大正 7) 年 3 月 21 日など
- 55) 小林一三「生徒の品性について」『歌劇』第 49 号 1924 (大正 13) 年 4 月など
- 56) 例えば、「寶塚より」大阪朝日新聞神戸附録 1915 (大正 4) 年 6 月 28 日には、歌劇に男優を受け容れる計画に触れ、「さらでも歌劇團の女優が近來稍

- 不眞面目なる行動を耳にする際果して斯かる計畫の實現されなば清々たる武庫の流れも爲に何處まで濁ることやら」とある。また、少女歌劇の雲井浪子と歌劇學校教師の坪内士行の結婚がスキャンダルとして話題になるほか、大正末以降は少女歌劇の生徒らを対象とするゴシップ系の報道が少なくない。
- 57) 「藝妓學校を観る」大阪朝日新聞神戸附録 1911 (明治 44) 年 7 月 26 日、「福原の藝妓芝居」大阪朝日新聞神戸附録 1915 (大正 4) 年 12 月 10 日、「藝妓芝居を観る」大阪朝日新聞神戸附録 1915 (大正 4) 年 12 月 11 日などに報じられている。また、その当時の大阪や神戸では、芦辺踊り、浪花踊り、湊川踊りなど、多数の芸妓が出演する舞台興行が盛んに行われ、大正末には、いわゆるモダン芸者による河合ダンスなども出現していた。明治末に芸妓養成所を設けた大阪の大和屋主人阪口祐三郎は、自身も少女歌劇の準備を始めていたが、公演で先を越されたとしている (『小林一三翁追想録』同編纂委員会 1961 (昭和 36) 年)。
- 58) 小林一三「生徒と其父兄へ」『歌劇』第 31 号 1922 (大正 11) 年 10 月 2-6 頁
- 59) 小林一三「寶塚少女達への教訓と藝術の學園の大成に就て」『歌劇』第 113 号 1929 (昭和 4) 年 8 月 2-5 頁 ここでも、世間から艶めかしく見られ、誤解されること、それゆえに生活上種々に心がけが要ることを生徒に注意しているとしている。また、カフェーやダンスが出現し、社会全体で宝塚を表面的に真似つつも本質的に異なる方向性を造りだそうとする傾向が、新たな誤解を生む可能性に心を痛めているとしている。さらに、宝塚音楽歌劇學校がカフェーの養成學校という誤解され得ること、偽の宝塚生徒や男子学生を偽った不良の存在にも言及している。
- 60) 小林一三「寶塚の一日」『歌劇』第 128 号 1930 (昭和 5) 年 11 月 2-6 頁

(2013年11月10日原稿受理, 2014年4月21日採用決定)